

資料保存 - プラトン全集Platonis Opera 1578 Stephanus tom I, II, III修理と修復の経験 -

京都工芸製本協会 山野上 礼子

1. はじめに

京都工芸製本協会の山野上です。本日はこのようにお話をする機会を頂きまして、ありがとうございます。内山先生のプラトンのテキストの伝承についてのお話の後に、先生から以前依頼いただきましたプラトン全集の修理・修復の経験を基に、工芸製本(reliure)の話进行いたします。

2. 修復三つの柱

本の修復については、三つの柱から成り立ちます。

1番目は、本がバラバラになっている。これを単に何とかすると云うだけではいけません。一枚一枚、一帳一帳と本の状態を確かめて解いてゆきます。どんなふうに汚れているのか、どの様に綴じられているか、材料は何を使ってあるのか等々一つ一つメモをしていくことから始めます。この時一番にすることは自分が本の丁数を鉛筆で印すことです。昔の本は、どうしてもミスプリントがあります。「イ」の一番に自分のページ打ちを印しておかないと、長い作業中に迷子のページやプリントミスに出くわして、冷や汗をかきます。

今回最も驚いた先人の技術はネール(nerfs)と云いまして背のコブの綴じ方です。現代の製本の場合はフォー・ネール(faux-nerfs)と云いまして、本当に背に糸が通されているわけではありません。飾りとしてこのスタイルを残しているだけですから、ほとんどブレ・ネール(vrais-nerfs)と呼ばれる本をみることはありません。今回のプラトン全集の場合は、大きな本ですから、こんな太い麻糸が2本ひとつのコブ(nerf)ごとに見事に編まれていました(見本参照して

下さい)。こんなふうに出来る限り本の状態を記録してこの通りに復元します。

本を解体(debrochage)しながら記録を取り、元の材料のコレクションをしてゆく。カルテを作るわけです。これにより、修復の方法、限度、材料等々を考えます。

2番目の柱は、紙の修理修復です。今回は紙の折山 - 背—が酸化してボロボロでした。多いものですと1ページに2cm位の巾で茶色く酸化していました。紙の折山がボロボロ状になって離ればなれになっているものですから、これらをつつひとつ縫がないと綴じられません。各ページずつ順次糊付けして、元の形に整えます。何で接ぎ合わせるかと云うと和紙—典具帖、雁皮等—が一番いい、昔、ヨーロッパでは、Papier d'ongletと呼ばれる、巻きタバコや辞書に使われる薄い紙や模造紙(simili Japon)が使われました。《模造紙》は何を「模造」したのか？和紙なのです。最近の本物の和紙が一般的になってきました。私は良いものを見つけました。和文タイプ用の薄葉紙。これをいつも使用しています。最近和文タイプを使う人が居なくなったのでこの紙を手に入れにくくなり、困ったものです。この様にとても丈夫で薄い紙です。今回もこれで全部修理しました。所々にある穴の部分もこれをはった上(頁の中)にvolumeと同じ紙をうめて塞ぎました。破れた所も全部縫いでいって、一枚の元の状態に紙を修理します。

3番目の柱が製本工程になります。元の形、Tom I, II, IIIとしてvolumeを組み立てていきます。

この講演前に上映していましたビデオを、早く来ておられた方は見られたと思います。製本

完成に280時間、54工程の手順で製本します。どのような体裁の製本にするのが問題です。現在は、本当に元のまま、出版され、製本されたとおりにするのが理想とされています。ですから、学者、当時の専門技術の知識のある人、職人さん達によって、その形が決めます。そして、これをちゃんと決められた通りに実現するのが理想的ですが、これらが正確に実行実現できる所は、パチカンしかないと言われていいます。と云われるのは、当時の縫糸、麻糸、紙等々の材料が今でも保管され、使用できるのは、パチカンの修復部しかないと言うわけです。本に限らず、いろいろな美術工芸品の修復は、ここでしか出来ないとのこと。私は行ったことはないのですが、パチカンでは製本の修復のための講習会があり、ここで勉強した友人からその様に聞きました。

製本工程を説明することは時間がかかります。ホール前に道具の写真等を展示しましたので見て下さい。また、今、会場に赤いリボンをつけた5人の製本仲間がおりますので、時間のある方はこの人たちに質問して下さい。

製本の装丁で理想とするのは革、紙の端にいたるまで、元の本にはめ込むのがいいのですが、日本で私が製本をさせていただいた場合は、とにかく読めるように毎日利用できる本にしてほしいと言う話が多いので、私が感じていたとおりの装丁にさせていただいております。多分他の国の人に言わせると「なんてことをするのだ」と思われることと思いますが、文字を読む人があつての本ですから、その時代、その時代で職人が必要のように作った、そういう修復の仕方であっても良いのではないかと考えています。それで今回も元の本とは似ても似つかないものになっていますけれどもReliureのにおいだけは大切にしながら仕事をしています。多分これは感じていただけたと思います。何百年か経ち、平成の世に、こんなことをした人間がいたんだなと思って、手にしてくれる人がいればよいのですが。

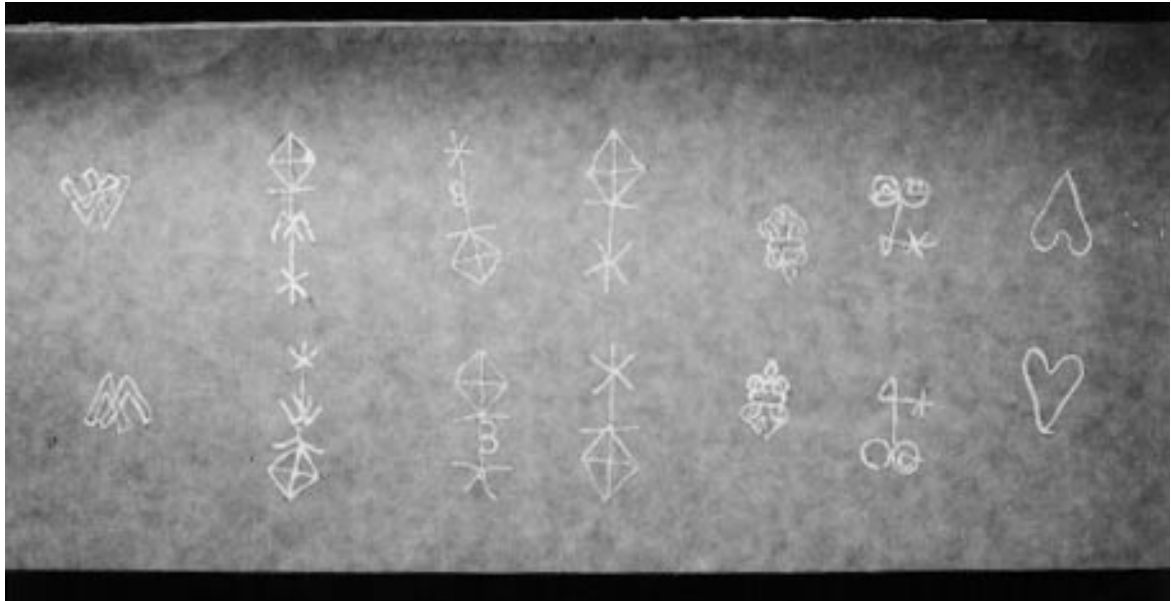
3. 修復の楽しみ

修復をしていると、昔の職人さんとお話ができる。作業中のタイムスリップはとても楽しいことです。その時代の世界に触れることが出来る。

ある本には、裏紙に当時の職人さんが書いたのか、誰が練習したのかわかりませんが、ペン習字(calligraphie)の試験を受けるためのものと思われる紙が出て来ました。それから、これはゴヤの版画を修復したときですが、版画を製本する場合は、版画自体を傷つけないために「のど」又は「アシ」と呼ぶ紙をはってあるのですが、その見事な、どこをつつついても適当なところの微塵もない仕事に出会い、吾が仕事を返りみて、ヒヤリとさせられることがありました。果たして自分はどこまでこの技術について行けるのかなと思いながら挑戦することもありました。

今回のプラトン全集にもありました。ホール前の展示ケースを御覧になったと思いますが、ウォーターマーク《filigrane》《すかし》が出て来ました。これらは二つ折りにした紙の所に全部入っていました。これは私が見つけたのではなく、堤美智子さん（前数理解析研究所図書掛長）が見つけてくれたものです。私はひたすら時間に追われ修復にばかり気をとられているものですから、透かして見ると云う余裕はなかったのです。《すかし》があると教えられて光にかざすと、何とも可愛らしい、しかし何の意味があるのか解らない《透かし》がそこにひっそりとありました。それで、これは記録しておかねばと、もう出来上がっていたcahiers一帖、一帖をもう一度開けて写し描きました。これが展示ケースの所にあるのです。これらは500年前に綴じ合わされ、誰の目に触れることもなくそこに有ったと云うことです。何とかこれらを皆に見てもらいたいと、いろいろ考えて形にしたのが外にあるものです。このウォーターマークに関しては何一つ解っていません。発見したばかりですから。ただただ今はこれらほのぼのとした形に魅せられています。

今回のプラトン全集に使われている紙は漉き



(ウォーターマーク)

方が大へん稚拙で漉きむら、混ざりもの、鉄粉やブラシの毛等が入っていました。にもかかわらず、これらの“すかし”の形の完成度は高いと思います。

4. 酸化の敵は《ほこり埃》

今日ここに来られた方々は、本をとおして生活なさっている人々なので最後に修復者の立場からお願いが一つあります。

クーリス(Prof.Konstantine Choulis)さんとおっしゃるパチカンの本の修復プロジェクトに関わっておられるアテネ大学の美術の先生にお目にかかって言われたことをお伝えしたいと思います。

お目にかかった折幸いなことに、イタリア語に堪能な通訳さんがついていて下さいましたので意思の疎通が出来て嬉しい時間でした。日本の修復の状態とヨーロッパの修復の現状等々いろいろお話を伺いました。その中で日本の図書館として今何が出来るのか、何をすれば一番い

いのですかと伺いましたところ「ウーンツ」としばらく考えられた後、言われたことは『埃を掃って下さい』とのことでした。酸化の一番の敵は埃です。だから埃を掃う事、と云われたのです。これならやる気のある人なら出来る。書庫への行き帰りに掃えばよい。全部しなくても少しづつやって下さればよい。と言われたのです。たしかに書庫を一度に全部掃除するということは大変な労力が要り、あんまり嬉しい仕事ではありません。本が傷んでいくのを何とかしたい。そういう気持ちのある人がほんのちょっと手を加えることで、少しでも本を長持ちさせる。埃を掃うことから、紙の酸化の現実、これらを解決する方法と諸々の問題を意識して下されば、古書の保管という次のステップへと続いてゆける。

とても納得出来る助言でした。ぜひ本の酸化を患い、古書の保護と管理に関心をお持ちの方々、この埃を掃うと云う実行をお願いします。これで終わります。(やまのうえ れいこ)

内山勝利教授、山野上禮子さんには平成14年度第3回近畿地区国公立大学図書館協議会講演会にて演題「洋書古版本の修復について」講演いただきました。

今号に講演内容を元にした原稿をいただき掲載させていただきました。改めて御礼申し上げます。